

## 米国映画の米国的なものとは何か？

トーマス・ドハティー

批判はあるにしろ、米国の映画産業は世界の映画市場に君臨しつづけている。著者はここでその理由や、最近米国の内外で大きな反響を呼んだいくつかの作品について語る。トーマス・ドハティーはマサチューセッツ州ボストン近郊にあるブランダイス大学映画科の教授。著書に「*Projections of War: Hollywood, American Culture, and World War II*」(1999)、「*Teenagers and Teenpics: The Juvenilization of American Movies in the 1950s*」(2002)など数冊。



米国映画、とりわけジョン・フォード監督の古典的西部劇の舞台に使われたモニュメント・バレー。

©AP Images/The Daily Courier, Jerry Jackson

「米国人は私たちの潜在意識を植民地化してきた」とヴィム・ヴェンダースの「さすらい」(1976)の登場人物は、賛美と不満の入り交じった口調で言う。このせりふは、ドイツ人監督によるロードムービーの中で言われるからこそそうなずける。ヴェンダースが初の米国ロケで真っ先に撮影したのは、ハリウッドの名匠ジョン・フォードがしばしば自作の舞台に使ったユタ州モニュメントバレーだった。

映画大国に対するヴェンダースの愛憎半ばする姿勢は、「植民地人」に共通する感情を表しており、それと同じ感情を「宗主国」の国民が持つこともある。アメリカンドリームของさまざまな素材を鮮やかに描いてみせるハリウッドの才能については議論の余地はない

かもしれないが、米国人以外の映画ファンにとって、この「洗脳」は不快なものでしかない。カンヌ映画祭で毎年、最高賞のパルム・ドールに輝く可能性が高いのは米国製の反米映画だ、というジョークが映画ファンの間でささやかれるのも無理はない。その完璧な見本がマイケル・ムーアの「華氏 911」（2004）だ。

DVD の海賊版やユーチューブによる映像の氾濫にもかかわらず、20 世紀の米国的価値観を大量生産し大型スクリーンで誇示する拠点となるハリウッドは、21 世紀もマーケットを支配しようとしている。米国の自動車産業の拠点であるミシガン州デトロイトは、トヨタ（日本）、ジンドルフインゲン（ドイツ）を拠点とする自動車メーカーに敗北したが、大衆娯楽産業の王者としてのハリウッドの地位は揺るぎない。米国的なものが優位に立つ理由のひとつは、例えば個人主義、行動の自由、上昇志向、幸福の追求（エロスでも金でも）、力づくで世直しするヒーローなど、まばゆいばかりの宝物が詰まったパッケージというハリウッド本来の魅力かもしれない。しかし、長い歴史を持つ 20 世紀フォックス、ワーナ・ブラザーズ、MGM などの映画会社は、今、自動車産業が取らなかった方法で繁栄している。新しい市場の動きに適応し、ライバルを迎え入れているのだ。現在のハリウッドの製品ラインは、外国仕様で生産されるだけでなく、組み立ても外国人技術者の手で行われている。

## 国際的な影響

エンターテインメント業界紙「バラエティー」によると、一般的にハリウッド映画の興行収入の半分以上は国外の切符売り上げによるものだという。国外での収益が国内での収益をはるかに上回ることも多く、各国でヒットした「007/カジノ・ロワイヤル」「ダ・ヴィンチ・コード」などは 70%以上にも達している。つまり、辛らつな外国人の目には最悪の輸出品としてしか映らないような、ばかばかしい悪ふざけや荒唐無稽なプロット、派手な爆発シーンは、国内ではなく全世界の観客をごっそりすくい取ろうとするハリウッドの手法から生まれている。物語の因果関係、重層的な性格描写、次々に繰り出される気の利いたせりふなどが複雑に絡み合っているよりも、ほとんど字幕を必要としないシンプルで先の読める筋立て、目をくらませる視覚効果、そっけないうなり声のようなせりふ回しの方が広く伝わる——シンガポールからセネガルに至る観客が、アメリカの十代の若者の購買傾向にそっくり重なるのも、これが理由だ。

もちろん、ハリウッドは外国に作品を売り込む国際企業として、常に外国の観客を意識してきた。映画が撮影スタジオだけで製作され、作品がすべて「メイド・イン・アメリカ」だった黄金期にあっても、すべて米国向けというわけではなかったし、それより肝心なこ

とは、すべて米国人によってつくられたというわけでもないことだ。当時も現在と同じように、国産と外国産の要素の比率は一樣ではなかった。国内育ちと外国生まれの影響がどのように競い合うかは作品ごとに違うからだ。それらの要素が混じり合い、競い合っていたことは、看板に書かれたスターや監督の名前を見ても明らかだった。ハリウッドは金で手に入る有能な外国人に対しては偏見を抱かなかった。1920年代と1930年代はドイツやイギリスの監督が、ルイス・メイヤーやデービッド・セルズニックなどの米国の映画プロデューサーが提示する金額の前に屈伏した。最近では、メキシコ人や台湾人の映画製作者たちが、マジックのようなテクノロジーや莫大な製作費の誘惑に乗りやすいことが証明されている。要するに、米国映画を最も米国的にしているものは、米国的でないものが積極的に取り入れられていることかもしれない。

毎年末に出るその年に封切られた映画リストを見ると、ハリウッドは長い間、分け前にあずかろうとする才能豊かな外国人の象徴的入り口として、「エリス島」の役割を果たしてきたことがよくわかる。2006年の作品はとりわけ、アカデミー賞に値するものもそうでないものも、外国勢のサクセス・ストーリーの豊かな見本を並べたような壮観さだった。それは映画や映画産業の「同化パワー」を証明するもので、どんなに米国に深く根ざしている作品でも、オープニング前のクレジットタイトルに米国的な名前が出てくるとは限らないのである。例えば、次のような作品がある。

### 「ディパーテッド」

マーティン・スコセッシが得意とする米国ギャング研究の最新成果である本作品には、さまざまなルーツが入り混じっている。香港の犯罪サスペンス映画「インファナル・アフェア」（2002）を甘い言葉で包み込んだこのリメイク版は、イタリア系米国人であるスコセッシが、ハリウッドのスターを起用し、ボストンのアイルランド系に設定を変え、「ミーン・ストリート」（1972）以来の特徴であるアドレナリン全開タッチで表現した。実際にボストン出身のマット・デイモンとマーク・ウォルバーグをキャスティングして、特徴的なボストンなまりでしゃべらせ、ボストンで撮影されたこの作品は（カナダの都市を米国の大都会に見せかけて撮るのが普通であるのに、本物らしさにこだわる魅力は決して小さくはない）、ボストンという狭い地域の物語を全米的なもの、そして（外国で大ヒットしたことから判断しても）世界的なものにした。映画は高く評価され、2007年、アカデミー賞の作品賞と監督賞に輝いた。



ミュージカル「ドリームガールズ」でアカデミー賞助演女優賞を受けたジェニファー・ハドソン。

©AP Images/Fritz Reiss

### 「ドリームガールズ」

舞台は一足飛びに、米国の音楽産業の本拠地として知られるデトロイトへ。ブロードウェイのヒット作をビル・コンドンが映画化し、ハリウッドのスタジオならではの演出が施された過剰で仰々しいミュージカルが大画面いっぱいに繰り広げられる超大作になった。フィクションのベールの裏に実話がはっきりと透けて見えるこの作品は、公民権運動の時代背景を盛り込みつつモータウン・レコードとザ・シュプリームスを思わせる女性グループの誕生と成長を描き、ラジオのトップ40入りの「費用対効果」について教えてくれる。米国人の耳には、この成功物語の裏にある通奏低音が、サウンドトラックと同じようにリズムカルに響いて聞こえる。テレビの「アメリカン・アイドル」という番組で2004年に優勝できなかったジェニファー・ハドソンが、音楽の競争の場である映画の「ドリームガールズ」でブレイクし、本物のアメリカン・アイドルに変身したのだから。この年は、米国的なノリのあるミュージカルが豊作だった。家族向けの「ハッピーフィート」は、コンピュータ・アニメのペンギンがロックに合わせて踊りまくりながら環境意識を植えつける、言ってみればアル・ゴアのドキュメンタリー「不都合な真実」の子供版だ。

### 「リトル・ミス・サンシャイン」

同じ年に公開された映画のなかで最も子供を中心にしていながら、ひどく大人っぽく仕上がった。共同監督を務めたジョナサン・デイトンとバレリー・ファリスはヴィム・ヴェンダースとは異なり、ハックルベリー・フィンやジャック・ケルアック、ハリウッドの一連のロードムービーに着想を得て、機能不全に陥った家族をポンコツのフォルクスワーゲンのバンに乗せ、新たな土地に向かわせる。こうした作品の常として、重要なのは目的地（もちろん、カリフォルニア）よりも、旅と旅の参加者たちだ。美少女コンテストに出場する少女、独自の成功論を説いてまわるものの人生の失敗者である父親、ヒロイン好きの

祖父、疎外されたインテリ男と疎外された十代の若者、そして妻として母親として彼らをまとめあげる女。米国では大きな人気を呼んで愛された作品だが、国外ではふるわなかった。ハリウッドは、きわめて効率のいい「GPS（全地球位置発見システム）」を完成させたかもしれないが、世界中に広く受けるといことは均質化しているという意味でもある。せりふが多かったり、その土地特有の表現だったり、その国独特のテーマだったりすると、外国では利益をあげにくい。すべての超大作が熱心に追い求める万国共通のスローガン「ノンストップのジェットコースター体験！」に磨きをかけていく方がいいのかもしれない。

### 「プラダを着た悪魔」

海外市場でより健闘したのは、ローレン・ワイズバーガーの小説をデービッド・フランケルが映画化したコメディメロドラマ。ファッシュナブルこのうえないシンデレラストーリーだが、シンデレラといってもガラスの靴をはいているのでなく、一流デザイナーのドレスで身を固めている。アン・ハサウェイ演じる前途洋々の純情な若い女性は、大画面のステージをおしゃれに、カッコよく、美しく闊歩する。一方、メリル・ストリープ演じるやり手のファッション誌編集長は、映画評論家ロビン・ウッドが「ローズバッド症候群」と呼んだ悲しい運命に耐えている。つまり、アメリカといえども富と名声は心と人格が伴わなければ不完全で、金の亡者は「市民ケーン」（1941）のチャールズ・フォスター・ケーンのように、無垢な子供時代を恋しがりながら孤独のうちに死んでいくのだ。

### 「父親たちの星条旗」「硫黄島からの手紙」

クリント・イーストウッドがハリウッド史上例を見ない賭けに打って出た野心的2部作。2つの独立した作品が同じ物語を敵対する両陣営の視点から描いている。時期を少しずらして公開された2本は、年末に有名映画批評家たちが選ぶ「その年のベストテン映画」の上位にランクインしたが、どちらも米国の観客には受け入れられなかった。米国人にとって第2次大戦は聖域で、無益だったかとか、道徳的に見合う価値があったかを論じるものではなく、常に褒めたたえるべき出来事なのだ。

皮肉というか当然というか、外国生まれのアーティストのほうが、米国を象徴する俳優で監督のイーストウッドよりも、正確に米国人の心情を読み解いたりする。船から降り立ったかつての移民のように、彼らも母国の伝統を携えてはきたが、地元の言葉をたちどころに覚え、作品的にも商業的にも高い評価を勝ち取った。

### 「クイーン」

スティーブン・フリーアーズによるこの現代のコスチューム劇が米国で成功したのは、長年にわたる米国人の英王室に対するあこがれを反映している。しかし、「あなた方の痛み

がわかります」と訴えかける民主的な理念（トニー・ブレア首相）と、君主として感情を表に出さない威厳（エリザベス2世）との対立は、それぞれがダイアナ妃の死を受け止めていくうち、最後には予期せぬ親しい関係を生み出すことになる。女王の伝統的なストイシズムは、セレブリティ文化によって安易に流される涙よりもすがすがしいものだという意外な発見がある。

### 「ユナイテッド 93」

多くの米国人にとって、あの年に起こった最も強烈で悲痛な出来事を映画化したのもイギリス人だ。飛行機のcockpitを舞台にしたポール・グリーングラスのこのサスペンス映画は、2001年9月11日のテロ攻撃を詳細に描いた初の長編映画だった。ローテクで、リアルタイムで事件を伝えるように描かれたドキュメンタリー風のこの作品は、スターの力を借りる必要もなく米国民の心を直撃した。米国内の映画館で「ユナイテッド 93」を見るのは、腹部にパンチを連打され、「死を忘れるな」という身の引き締まるような言葉を突きつけられることと同じだったが、このインパクトは国外の映画館では伝わらなかったのではないだろうか。

### 「ボラット 栄光なる国家カザフスタンのためのアメリカ文化学習」

お上品とされるイギリスからやってきた野卑で下品極まりないこの男についての議論を抜きにしては、米国映画界における外国の仕事人たちの影響を十分に語ったとはいえない。これは畏をしかけて挑発する工作者サシャ・バロン・コーエンが、東海岸（ニューヨーク）から西海岸（女優でモデルのパメラ・アンダーソンを探して）まで、昔の開拓者が通った伝統的道筋をたどる、ねじくれたロードムービーなのだ。アレクシス・ド・トクビル [アメリカの民主主義について書いたフランスの思想家] とまったく同じとはいえないが、コーエン演じる無知なキャラクターも、最終的には、やはり米国人がこれまで気づけなかった自分たちの一面を見せてくれる。それはつまり、米国人には、最も耐えがたい外国人を限りなく受け入れる寛容さがあるということだ。

### 「パンズ・ラビリンス」「バベル」「トゥモロー・ワールド」

3人のメキシコ人監督（ギジェルモ・デル・トロ、アレハンドロ・ゴンザレス・イニャリトゥ、アルフォンソ・キュアロン）はそれぞれ、悪夢のような過去、出来事が絡み合う現在、ユートピアではない未来をテーマとして、注目度抜群の3作品を生み出した。思わぬ幸運を掘り当てる彼らの才能は、ハリウッドに外国人が浸透していることを最も如実に物語っている。娯楽メディアから「スリー・アミーゴス」と呼ばれている3人組は、うわべが派手で明るい楽観主義に満ちた米国のメインストリームの作品に、絵画のような質感と悲劇的な感覚、つまり、最後にはヒーローたちが死んでしまうとか、世界は人間の介入を受けつけないほど悪意に満ちているといった、国境の南の厳粛さを持ち込んだ。

2006年に公開された米国映画や外国映画のうち、多言語・多国籍によるハリウッドの未来を最も的確に予言しているのは、タイトルとは矛盾するが、「バベル」かもしれない。この映画には、異文化の混合が配役や製作者、ロケ地（モロッコ、カリフォルニア、メキシコ、日本）、感性に見事に生かされている。外国人もハリウッドと同じやり方で報いながら、米国映画を植民地化しているといえるだろう。

---

この記事に述べられている意見は、必ずしも米国政府の見解または政策を表すものではありません。